

## 編集後記

社会倫理研究所機関誌『社会と倫理』第28号(2013年)をお届けする。本号は、特集2つと、論説1本、書評11本、新刊紹介2本からなる。全体としては、特集中心の構成となっている。近年掲載している**社会倫理の基礎**や、前回設けた**社会倫理の資料**コーナーは、今回お休みした。

特集の諸論考に関する詳細な内容については、緒言と本文を参照願いたい、ここでも簡潔に紹介しておく。「特集1:ロボット・社会・倫理」では、滋賀大学の神崎宣次氏をコーディネーターとしてお招きし、中堅から若手の気鋭の哲学・倫理学研究者に論考の執筆をお願いした。本特集は、神崎氏の諸言(「ロボット倫理学のスターター・キット」)と五本のサーベイ論考で構成されている。岡本慎平氏の論考「日本におけるロボット倫理学」は、日本人によるロボット倫理に関連する議論を古いものから新しいものまで纏めている。本田康二郎氏の論考「工学倫理とロボット倫理」は、工学倫理の領域において蓄積されてきた議論に基づいてロボットの倫理的問題を概説している。西條玲奈氏の論考「性愛の対象としてのロボットをめぐる社会状況と倫理的懸念」は、これまで議論があまりなされてこなかった、セックスの対象としてのロボット利用に関わる倫理問題を網羅的に提起している。久木田水生氏の論考「人工知能・ロボット・知性」は、人工知能研究の発展過程と、その哲学との相互的影響関係を概説している。佐々木拓氏の論考「ロボット倫理学の基礎：責任とコントロール」は、自由意志と責任に関する哲学的議論と、それに基づくロボットなどの人間以外の個体に対する責任帰属の問題を概説している。これらのサーベイは、ロボット倫理に関わる従来の議論のうち、現在のところ容易にアクセス可能な形で集約されていないものを選んで効率的に纏めたものである。今後の日本におけるロボット倫理の進展に大いに貢献することが期待される。

「特集2：道徳判断研究の現在」においては、実証的心理学・哲学研究者による道徳判断研究を扱っている。『社会と倫理』では初めて唐沢穰氏、高橋征仁氏という心理学系の研究者の論考を掲載

している。本研究所の取り組むテーマは社会倫理であり、社会倫理には心理研究が大いに関係しているため、今回のような試みが今後も継続することが期待される。唐沢氏の論考「社会心理学における道徳判断研究の現状」は、道徳社会心理学の研究を、直観的情報処理過程、通文化的道徳基盤とコミュニケーションの役割、道徳的動機・懲罰動機といったトピックに焦点を絞って、その意義と課題について論じている。高橋氏の論考「〈理由なき反抗〉の理由—青年期の道徳的相対主義とテストステロン」は、道徳の発達心理学研究、特に青年期研究を歴史的に振り返り、進化論的視座からとらえ直すことの意義を論じている。論考「哲学・倫理学における道徳判断研究の現状—道徳判断の本性と情理—」では、哲学・倫理学研究者鈴木真が、その領域における道徳判断の本性に関わる研究とその方法論を概説している。鈴木が緒言で述べているように、本特集が、心理学系の研究と哲学研究にまたがる道徳判断研究の現状を周知し、さらに日本において共同研究が進展する契機となることが期待される。なおこの特集では、全論考を査読した。建設的な査読コメントによって、各々の論考の質と読みやすさは明らかに改善した。ここで査読者の方々に御礼申し上げる。

論説としては論考を一本掲載している。奥田太郎の論考「人道支援を支えるのは博愛か偏愛か」は、人道支援の倫理が、すべての人々を公平に救うということを目的としつつ、それは不可能だという自覚の下で成立するものだと論じている。

書評では、11冊の新刊書を取りあげている。社会倫理関連領域の広大さを反映して、書評の対象となった研究書のジャンルは多岐にわたっている。先号より設けた**新刊紹介**コーナーでは、人道的介入論とリスク論に関わる2冊の新刊書を紹介した。

本号が、社会倫理研究の学際的センターを標榜する本研究所の機関誌としてふさわしい充実したものになったのは、執筆者の方々のおかげである。また本号の編集においては、社会倫理研究所事務の井上千織さんに様々なご尽力をいただいた。ここに記して感謝の意を表したい。

鈴木真、大庭弘継、奥田太郎